



お知らせ

5月7日(土) 例会

- ・午前9時半～12時 八千代市立郷土博物館にて
- ・『資料集Ⅳ』学習(旧高津村ほか資料学習)
- ・午後は、6月5日の市博物館主催のバス見学会の案内役を会としてつとめるため、安食方面など印旛沼掘割工事関連の現地を下見に行きます

5月28日(土)～29日(日)

一泊旅行見学会(鳶の細道・丸子・静岡市方面)

5/28 勝田台北口6:50集合＝バス＝柴屋寺＝丸子宿＝道の駅・・・歩・・・鳶の細道・・・お羽織屋・・・明治トンネル・・・宇津の集落・・・道の駅＝島田宿大井川川越遺跡＝島田市博物館＝焼津ホテル (tel 054-628-3155) 泊

5/29 藤枝市内＝志太郡が跡＝岡部街内・歴史資料館＝五智如来公園(旧誓願寺)＝駿府城跡＝(蓮永寺)＝日本平～ロープウェイ～東照宮～日本平＝勝田台

- ・会費＝36000円ぐらい
- ・申し込み＝5月15日までに事務局へ
- ・お友達をどうぞお誘いください

6月5日(日) 市博物館活動協力活動

- ・わかば号を使用
- ・印旛沼掘割工事関連の地の見学会の案内

7月17日(日) 例会

- ・午前9時半～12時 八千代市立郷土博物館にて
- ・調査研究情報交換

8月21日(日) 例会

- ・午後1時半～ 八千代市立郷土博物館にて
- ・学習会原稿打合せ
- ・郷土史研通信 51号発行

報告

4月10日(日)

平成17年度定期総会と会員発表会  
盛会のうちに終了しました

☆平成17年度定期総会

- ・午前10時～12時 八千代市立郷土博物館にて、会員数53名中、参加者数34名 委任状8名で、平成16年度の事業報告・決算報告、および、平成17年度事業計画案(P4とP6に掲載)と予算案について、熱心な討議の上、承認されました。
- ・なお、今年度の年会費は3000円に決まりました。未納の方は、例会時などにお持ちください。

☆会員研究発表会

- ・午後1時10分～4時 八千代市立郷土博物館
- ・プログラム
- 1. 「算額、その後」 佐久間会員
- 2. 「間宮士信の事績について」 畠山会員
- 3. 「寺子屋の研究」 真砂会員

会員発表の詳しい報告は 3～4ページに掲載

2月13日(日) 例会

- ・午後1時～4時半 八千代市立郷土博物館
- ・参加者：21名(うち新入会員1名)

1. 高津村岩井源左衛門家史料「文化十一年五月祖高山高秀霊神式百年御忌御法事御祭事記録」の読解と、その内容の把握を畠山会員に解説いただきながら学習し、19世紀初頭の高津村の様子がよくわかりました。
2. 寺社の関係＝正福寺(高津明神別当)、観音寺、村外から導師では泉の龍泉院、夏見の長福寺、佐倉の勝全寺、舟橋御宮、御山(二宮神社)など
3. 主要な村役人＝名主彦右衛門、名主見習役太兵衛、御宮守源左衛門など
4. その他、領主間宮家の人々、神仏習合での法要祭事の様子、村内に地蔵堂もあったらしいことなど (蕨由美・記)

3月20日(日) 歴史散歩  
中川船番所資料館見学会  
平塚 胖

3月20日(日) 薄曇り・一寸肌寒い。

13時に京成八幡駅の改札口に16名が参加・集合した。

牧野さんの引率で13時10分出発 都営地下鉄新宿線本八幡から東大島へ向かう。

東大島駅で下車、先ず駅の正面にある大島・小松川公園に立ち寄り小松川閘門跡を見学した。

この公園の築山の中に屋上が冠になっていて、一寸西洋の古城を思わせる建造物があります。

これは昭和2年に工事を開始し昭和4年に完成した小松川閘門の二つの門扉のうち一つがモニュメントとして保存され、閘門のゲートの部分まで築山で埋められ塔の部分が地表に出ているとのこと。



江戸時代から明治、大正時代には小名木川・旧中川を通過して江戸・東京まで、人や荷物を船で運ぶことが一般的でした。しかし、明治43年に荒川放水路の建設が始まり昭和5年に完成したが、荒川と中川との間に約3メートルの水位差が生じ、船の通行に支障があるので荒川放水路建設と同時に閘門の建設も進められ、船堀閘門・小名木川閘門・小松川閘門が作られ昭和50年頃まで利用されていました。

経済成長と同時に鉄道・トラックなどの陸上交通の発達により閘門の利用が極端に減少し、昭和51年に閘門を閉鎖・撤去してこの辺一帯が公園になりました。

この公園から中川を渡り、小名木川の番所橋を渡るとすぐ数百メートルの所に今日の目的地である「中川船番所資料館」があります。資料館は船番所の跡地から北に50メートルほどの所にあり、3階建てで、珍しいことに2階フロアが全部釣具展示室です。特に和竿を中心に歴史や現在の竿師の紹介をしているので、釣り好きの方は是非一見を！

14時10分 館員の鈴木氏が案内に立ち直接3階へ

3階は常設企画展示室で、江戸の東の関所であった中川船番所を原寸のジオラマで再現しています。小名木川が東西に流れ、東は行徳、西は隅田川です。そしてお役人が等身大に造られており、小名木川を出入りする船を見張っているところ。このジオラマは夕暮れ時の船番所の情景で、原寸大のためか、なんだか臨場感があります。

中川船番所は江戸の治安を守るため江戸の出入口に設けられた関所。河川通運の俗に言う「出女に入り鉄砲」即ち、江戸へ出入りする船の積荷と人を改める(取り締まる)関所であったが、後には物資の流通なども把握するようになったようです。

そして明治2年に番所が廃止されるまで約220年間に渡りその役目を果たしました。

3階展望室の窓からは中川船番所跡地の向こう側に現在建設中の新小松川閘門が見えます。これは先の阪神大震災の教訓を生かし、災害対策のための水路・水運が見直され、数十年前まであった旧小松川閘門から数百メートル川下に、荒川と旧中川を結ぶ新しい小松川閘門の建設が進められているのです。

自由観覧の後15時20分に資料館を出る。

番所の跡地は「昭和7年の『大島町誌』によると肥料所が建てられ、その後も工場として使用された」とのこと。今は東京都

が大島9丁目辺りを再開発し、船番所跡の一面には東大島ファクトリーとして町工場の数社が入っている。敷地から豊後梅の枝が道路に出てきており、少し赤みがかった梅の花が満開になっていた。枝を折らないでくださいと札が下げてあった。

我々は小名木川に沿って西に向かって歩く。程なく見学会資料にある、真言宗のお寺、宝塔寺があります。境内には塩舐め地蔵と言う珍しい名前の石地蔵

(別名いぼ取地蔵とも言われている)があり立ち寄る。この地蔵は小名木川から掘り出され、宝塔寺に納められたと由来にあるが、私の目では地蔵には見えず二つの石が積み重ねてあるように見えた。

続いて、少し歩くと小さな交差点の角に一寸黒っぽい石造物があり、それは都の有形文化財になっている庚申塔(金剛像)であった。例の如く道草を食いながら更に西へ。同じく資料の大島稻荷神社に立ち寄る。境内に入るとすぐの所に筆を持った真新しい芭蕉の石像があります。その横に立派な芭蕉の句碑があり、「五月雨を集めてはやし最上川」と刻られている。何故こんなところに最上川なのか・・・？また、刻まれた句の文字(草書体？と言うのでしょうか)の研究と茅の輪のくぐり方やその由来の説明書などを皆で研究した。

歩くこと約1時間で16時30分、都営地下鉄大島駅に到着。記念写真を撮り解散。お疲れさまでした。

私は今から45年くらい前にこの大島9丁目に2年ほど住んでいました。そのころはまだ肥料工場があり、夏 南風が吹くと何とも言えない魚粉肥料の匂いが鼻についたのを思い出しながら歩いた。今ではそんなかけらも見いだせなかった。当時共同玄関、共同トイレの社宅が今では8階建ての立派な独身寮になっているのが見えた。愕き・・・。

## 会員研究発表会の報告

4月10日の定期総会後に行われた会員研究発表会は、今年度よりの初めての試みでしたが、3名の会員に、郷土史展でのテーマをより深めた研究をわかりやすく講演いただき、充実した研究発表会でした。

今回は聴講された会員に、その要旨と感想を書いていただきました。

### 佐久間弘文会員の発表

「算額、その後」を聞いて

何から何まで「目からウロコ」

佐藤二郎



佐久間氏

・『史談 八千代』第29号「高津邑鈴木半兵衛奉納の算額とその周辺」(佐久間弘文氏)に文化14年(1817)12月20日、諸国を遊歴していた越後水原の算家山口坎山が茅田村飯綱権現を参詣し、奉納されている算額をみて、著書「道中日記」にその日について記していると、述べられている。

・当地茅田村に立ち寄った前後の足取りについて「八千代の算額、その後」—算額者山口坎山遊歴の跡—について調査研究され、本日の発表となった。

・資料として配布された「八千代の算額、その後」・添付図「山口坎山の常陸・両総の遊歴行程」に基づいて説明がなされた。

・山口坎山(文化14年10月14日・36歳時)が江戸・神田を旅立ち、下総国→常陸国→上総国→安房国→再度・下総国 当地萱田村の飯綱権現参詣(12月20日)までの約60余日、遊程約200里の道中記の

前半部である。その遊程ルート、訪問先、宿泊地については図面にて詳しく説明がなされた(その後、常陸国 奥州へと向かわれた)。

・千葉県内の遊程ルートについて詳しく見てみる。12月8日栄町安食に入り、12月20日八千代市平戸を出立するまでの12日間に、連泊したのは12日・13日岬町長者と14日・15日勝浦市串浜の2ヶ所のみであり、その他は1泊である。この間、算額を見たのは成田不動・新勝寺、芝山観音、高根八幡そして飯綱権現の4ヶ所である。

・12月20日「同郡茅田村(八千代市萱田)飯綱権現参詣、算額二面を見る。同郡平渡村(八千代市平戸)百姓屋泊」とあるが、何処の百姓屋かは不明とのことである。

・12月21日「平渡村出立、川口郡若柴宿(龍ヶ崎市若柴)山形屋泊」とあり、平戸橋から木下道を通り、利根川は栄橋付近の渡船を利用したものと推定される。若柴は今でも旧水戸街道の風情を残している街のたたずまいである。龍ヶ崎や牛久はうなぎの産地ではあるが、ここ若柴ではうなぎを食べないという習慣のある街であるとのこと。

・この常陸国、下総国の遊程の中で上蛇村(水海道市上蛇村町)と明ヶ石村(つくば市明石)は、この道中では重要な宿泊地となっていること、また何故、各地の算術者を歴訪したかはこの道中記には記述がなく解らないとのことである。

・鬼怒川、小貝川沿岸は河川の氾濫地であり、その復興の治水事業のための測量技術にこの和算算術者が活躍したのではないだろうか。平戸でも印旛沼干拓、新川治水のため、同様に測量技術が必要であったのであろうとのこと。

・この当時、和算が世界に比類のない技術であり、寺子屋での教え、一般庶民の教養のための和算とのことである。

・この和算は、算術のうちのほんの一握りの技術であるが、この技術は太閤検地時の土地丈量から明治初期地租改正時の地積図作成に大いに和算が活躍したが、この活躍も地租改正の大事業を最後に衰退したとのこと。

・江戸時代の旅人は一日十里の旅を行い、今から考えるとかなりの健脚であり、ちなみに水戸街道は、江戸から水戸まで三十里を二泊三日で往来したとのことである。

・このように和算の発達、教育、応用、そして衰退というその時代背景から、江戸から下総国、常陸国そして奥州へと地理的状況を、時間的構成および位置的構成が明確にされていることは大変よく理解できた。

・このことから、知らないことを教えてもらうことが楽しいことであり、「目からウロコ」という感じが、新会員の小生にとって強烈な印象であった。

### 畠山隆会員の発表

「間宮士信の事績について」

の雑感

関和時男



畠山氏

高津村領主(二百石)間宮氏について畠山会員と共に間宮氏二代正秀(高秀霊神)二百年忌の小冊子や観音寺にある士信の墓、間宮一族の建てた顕彰

碑の碑文、間宮氏の位牌等で、ある程度の調査が進められていた矢先、去年6月突然の病で脱落のやむなきに至ったいきさつもあるので本日の発表を楽しみにしていた。

畠山会員は調査した数多くの事績『新編武蔵風土記』『小日向志』『新編相模国風土記稿』等を発表され、優れた民俗研究家としての士信を見事に浮き彫りにして見せた。配布された資料の『小日向志』下巻巻四から引用した古文書のト書き部分に(キリステヤンを吉利支丹と書いていたが将軍家御名綱吉公の吉の字を諱て後に切支丹と云う)とあり、本文にも(切支丹むかしは吉利支丹と書きしが有徳院殿(吉宗)御諱の字を避けて改めこれしとぞ)とある。細かい字句の移り変わりに興味を示す士信の一端が窺い知れて面白い。

このことは士信が撰文した「山荘之碑」に繋がり今回の発表の一番興味のある部分である。この碑は、当初切支丹屋敷の跡地を与えられた大江讃岐守の下屋敷内に建てられ、屋敷替えにより、関口台(現文京区関口)蓮華寺の境内へ移され、明治41年に蓮華寺が現在の中野区へ移転と共に移されたものだが本来は文京区所有の碑であろう。

このように碑が転々としながらも壊されたり、廃棄されなかったのは喜ばしい。我々も高津村調査がなければ興味を示さなかったであろう。しかし、間宮氏研究にはまたとない貴重な史料の碑である。また、この碑の存在を知り早速調査に足を運ばれ貴重な資料を提供された畠山会員の熱意には脱帽したい。

この士信の作した碑文をみると何か士信が身近に覚えるのは私だけではないであろう。上役から頼まれ作文し碑を

建てたとはいえ士信にとって暖めていた思いを刻み残す又とない機会であったろう。遊女朝妻のエピソードの挿入は、儂く散りゆく女のあわれを桜花と獄吏の心情を織りなして短文の中に士信のものあわれにゆれる気持ちが伝わって胸を打つ。

ともあれ今回畠山会員の発表を聴く機会を得たことに感謝を表すると共にこの愚文を謝し、今後のさらなるご活躍を期待してやまない。

(注)文中『小日向志』古文書にト書きは「綱吉」、本文は「吉宗」とあるが、当時は「吉宗」とされていたが調べてみると「綱吉」と云われているもの本もあるということであろう。

#### 真砂弘会員の研究発表 「寺子屋の研究」を聞いて

小菅 俊雄



真砂氏

永年障害児教育に携わってきた真砂氏は、その経験を基にして障害児や女子の教育という視点から寺子屋の研究を進めてみた。

寺子屋の資料として千葉県では川崎喜久男氏の筆子塚の調査がまず挙げられる。

かならずしも正確ではないが、一説によれば、江戸時代寺小屋の10軒に1軒は障害児が学んでいたという障害児教育に寺小屋の果たしていた役割に感動を覚える。

また「古川柳に見られる寺子屋・障害者」は古川柳のもつ風

俗資料に注目、寺子屋による女子の教育の実態がうかがえる川柳を例示する。

また吉橋・貞福寺にある法印存秀の取子塚を紹介、取子(トリコ・トリゴ)について解説をされる。

取子は虚弱児などが生まれた場合、神官や僧侶に仮親を頼み健やかな成長を願ったようで、報恩のために筆子などと建てた墓石が取子塚と思われる。

また高津新田の寺子屋調査の際神照寺に寺子屋を開いていた藤沼郡次の碑と犢橋村明細書書上げ帳の関係を調べているうちに寺子屋と明治5年の学制による小学校の間に他県では「郷校」があるが千葉県にはなぜ少ないかについて疑問が生じた。

川崎氏はこの明治3年の村明細書の郷学校を「村営の郷学とすることができるが学制後の公立小学校に連なる村営の寺子屋と理解してもいいのではないか」と書かれている。

移行の段階が他県と違ったのかという問題を提起される。

今後の研究の発展が楽しみである。

#### 本年度の主な事業予定

- 1.本年度研究課題・旧村の今「旧高津村総合研究Ⅱ・高津新田古文書研究」・文化祭展示発表
- 2.「史談八千代」第30号の発刊(全会員の感想や希望なども掲載していく)
- 3.「郷土史研通信」の発行(5、8、11、2、の各月)
- 4.市内社寺奉納俳句碑等悉皆調査(継続)
- 5.博物館活動への協力  
(「再発見八千代」の行事に講師案内役で参加、6/5. 2/26.)

4月29日(祝)  
フィールドワーク  
高津の歴史と民俗を訪ねて  
佐久間弘文

JR福知山線の脱線大惨事の記憶がぬぐい切れないまま始まった今年の黄金週間であったが、総会で急遽きまった高津の調査には、初夏を思わせる日差しの中に会員17名が午後1時に観音寺に集合して始まった。

幾たびとなく訪れた観音寺ではあるが、ここはいつも新しい何かを発見できる不思議な場所でもある。

①参道の四国霊場供養塔道標と不許葦酒入山門の戒壇石

いつも話題提供の多い大師講道標であるが、供養塔と道標の役目のほかに、今は無い「正福寺」とのかかわりを語る大事な歴史遺産である。



②吉橋大師十番札所のお堂

改めてお堂に掲げられている四国十番切幡寺きりはたのご詠歌を確認した。「世具志舞越 多一春知爾紀り者堂 後能代満帝乃佐者里登ぞ那る」(欲心をただ一筋に切幡寺後の世までの障りとぞなる) 額の裏面には「当村治兵エ 勲八等岩井久治 大正八年吉日」と書かれていた。

③その隣の古いお堂

堂内に坐像三体、中央の大師像には「八十八番本尊 施主中村茂助」と刻されている。

左端の大師像の下部は二人の戒名らしき刻字があり、その一つの年号は天保辛卯(天保二年)であり、参道の不許葦酒入山門の戒壇石の設置年と同じである。次いで観音堂に立寄り、幾つ

かの謎(?)に挑戦することになった。

④観音堂は吉橋大師七十一番札所である。しかしお堂正面のご詠歌は四国六番安楽寺のご詠歌であり、寄進者は観音寺十番と同じ岩井久治氏である。

ご詠歌は「加利の世に 知希や宇阿らそう無屋く奈里 阿んら具古く能 志遊ごをのぞめよ」(かりの世に 知行あらそう むやくなり 安楽国の 守護をのぞめよ) 何故七十一番札所に六番安楽寺のご詠歌が掲げられているのか? この日の結論はでなかった。

⑤七十一番札所お堂の脇に立つ数基の石造物、左から二番目は大師供養塔ではないか?

正面上部に梵字一字、その下の文字はかすかに「新四□□場」と読めないか。更に左側面には「悪人□□・・・」、これは七十一番ご詠歌「悪人と ゆきつれなむも 弥谷寺 ただかりそめも よき友ぞよき」に通じる。右側面は文政七甲申と読める。

⑥観音堂本堂の正面高いところに、ご詠歌らしき赤粋の額一面がある。これを読み取ると、「六番 遠近の堂津木毛 志ら怒高津寺 仏越い拝だにむ身社 多乃もし」(遠近おちこちの たつきも知らぬ高津寺 仏を拝む 身こそ頼もし)

このご詠歌らしきものは、四国六番のご詠歌とはまるで違う坂東六番のご詠歌であることが判った(観音寺縁起)。高津に、独自の観音の巡礼場所があったか? 一番~五番もあるのか? あるいは高津地区以外のどこかにあるのか? 疑問は完全に解明されないまま検討課題として残された。

⑦観音堂裏の「両墓制の埋め墓」を見学。土饅頭がここそこに見える。

この後⑧妙見神社⑨梵天塚⑩妙正大明神⑪正福寺跡などを見学し、⑫高津比咩神社で多くの石造物とそこに刻された人物名、

特に文化十一年五月に行われた「祖高山高秀霊神式百年御忌御法事御祭事記録」に登場する人物との照合などを行った。

再び観音寺に戻って⑬高秀霊神社に参拝したのち、今年の高津村総合研究のテーマに関する簡単な打合せを行い、午後4時散会となった。

2月3日  
二宮神社の節分祭に  
参加して  
平塚 胖

平成17年の二宮神社の節分祭(寺院は節分会、神社は節分祭と言うそうです)に郷土歴史研究会から村田会長・森山・酒井・平塚・斎藤氏の5名が参加した。

斎藤正一氏は時平神社の氏子総代で、今年の時平神社関係の世話人をされています。

氏から節分祭で拝殿に昇り行事に参加してはどうかのお誘いを頂いた次第で、言うならば我々は時平神社のわか氏子です。節分祭の拝殿に入れるのは参加申し込みをした人のみです。

時平神社は二宮神社の七年祭の関係神社であり、毎年節分祭には参加しているとのこと。従って時平神社の外、関係神社・二宮神社の宮司が担当する各神社からの氏子が地区毎に参加して7、80人の人たちが集まった。

例年、節分の頃は一年で一番寒い時期ですが、当日は抜けるような快晴でとても暖かだった。

12時20分大和田の三叉路に集合し萱田町の氏子さん達5人と我々5人がマイクロバスで二宮神社へ向かった。途中高津から2名が同乗した。

私どもは1時頃到着し、先ず、社務所の広間に通され御神酒とおでんを振る舞われた。次第に他の神社の氏子たちが集まって来て大広間は一杯になった。

順次、広間から拝殿へ向かうのですが拝殿の前で豆が少々は入った一升枧を頂き拝殿に昇ります。定刻2時、拝殿に雅楽が流

れ、神職が入場し節分の神事が始まった。修祓（神職が祓麻＝はらえぬさを左右に振ってお供え物、玉串を初め、その他の神職参列者のすべてにお祓いをを行います）に続き献饌（奏楽にのってお供え物を恭しく飾ります）、祭主が祝詞を奏上（＝かしこき二宮神社の御前に・・・で我々参列者も頭を下げます。）に続き来賓及び各地区世話人などが玉串奉てんし、奏楽にのって撤饌（供物を神前より撤去します）となります、儀式は30分ほどで終わりました。続いてお神楽が始まります。

1. 巫女の舞い 2. 縁起ものの大黒の舞い 3. 獅子の舞い 4. 鬼の舞いと続きます。

鬼の舞いは赤鬼、青鬼、寅鬼等5匹（人？）、大小の鬼達が舞台狭しと踊ります、この鬼の舞いが終わりに近づくと、我々参拝者が先程いただいた一升枡の中の豆を鬼にめがけて打ち付けます。鬼達はあわてて拝殿から境内へ逃げて出てゆきます。我々はそれを追って境内に出てゆきます。これで節分祭の行事は終了です。

さて、いよいよ豆まきが始まります。境内に集まっていた氏子や子供連れの一般客（300人ぐらいか？）に舞台から神主や来賓の方たちが菓子袋・お餅などを撒きます。我々も一般客となり私は菓子袋を拾いました。残念なことにお餅は拾えませんでした。豆まきが終わると、二宮神社の今年の節分祭はすべて終了です。

私どもは御神酒と個人の名前入りの祈祷されたお札を賜り、マイクロバスに乗って大和田まで送っていただいた。私は新聞やテレビで大きな神社やお寺の節分祭（会）の豆まきを知っていましたが、今回拝殿に昇り、初めて節分祭の神事の一部始終を拝見・経験しました。是非来年も機会があったら参加したいものです。

2005 年春

高津の民俗歳時記

藤由美

2003年～4年の年越しは、念仏講のおばあさま方と昼は晦日のおこもり、深夜は氏子の皆さんと初詣とにぎやかに過ごしたが、2005年元旦は、朝寝坊を楽しみ、出かける途中、高津比咩神社に初詣。暖かな日差しの中、観音寺には八福神巡りの方もちらほら。布袋様がにこやかなお顔で迎えてくれる。

1月20日(木)、高津比咩神社のハツカビシヤ。八千代市の文化財に指定されて初めてのオビシヤだったので、市長も来賓参加。神主さん司式の修祓神事後、「甲乙ム」の大きな的を射る弓神事。観客も多く、当たっても当たらなくても、拾うと縁起がよいとされる矢を奪い合う氏子の声に狭い境内がどよめく。オトウワタシも神妙にすませると、念仏講のおばあさま方がハナミを謡い、あとは、一同隣接する自治会館で直会となる。

2月19日(土)雨、観音寺での若いお母さん方の子安講を取材させていただく。コロケと昔ながらの鳥飯の昼食をいただきながらの話は、学校のことや4月にお参りする秩父観音巡礼のことなど。食後は仏前で「めでたやな」を謡う。美しい歌声が本堂内陣に響きわたっていた。

3月は1日に妙見のオビシヤ、8日テントウ様、13日コクゾウ様の日とお聞きしたが、残念ながら参列できず。昨年3月末の観音寺の桜がきれいだったことを思い出す。

4月18日(月)、観音様の縁日は観音堂のオコモリ。「新田」のニワのお当番さんがお堂の戸を開け放ち、お厨子の扉も開けて念仏講のおばあさん方のこられるのを待つ。12時半に一同そろくと、観音様の念仏を唱和。その後は、漬物やソラマメをつまみながらお茶となる。春風がお堂の中に通りぬけていった。

## 9月以降の活動計画

- ・ 9月11日(日) 拡大役員会  
原稿締め切り・編集打合せ
- ・ 9月18日(日) 例会  
展示作品・機関誌編集打合せ
- ・ 10月9日(日) 機関誌校正  
史談八千代30号校正
- ・ 10月16日(日) 見学会(県内を予定・保護の会行事に参加)
- ・ 11月13日(日)  
文化祭展示作品共同制作作業
- ・ 11月19日(土) 文化祭  
会場準備・一般公開・史談八千代30号発刊
- ・ 11月20日(日) 文化祭  
一般公開・会場片付け・郷土史研通信52号発行
- ・ 12月18日(日) 見学会・反省会  
市内見学と忘年会
- ・ 平成18年1月8日(日)  
見学会・東海(品川宿ほか)七福神めぐり
- ・ 2月12日(日) 学習会  
次年度調査研究課題検討会・郷土史研通信53号発行
- ・ 2月26日(日) 博物館活動協力(徒歩・詳細未定)
- ・ 3月5日(日) 拡大役員会  
平成18年度事業打合せ他
- ・ 3月19日(日) 見学会  
歴史散歩

以上の計画は総会の決定ですが、変更もありえますので、次号以降のお知らせを必ずご覧ください。

編集後記：会員発表や見学会の報告など充実した記事満載で6ページになりました。(By. わらび)

[QWR07752@nifty.ne.jp](mailto:QWR07752@nifty.ne.jp)